



「お袋、俺、元気。」

10月はロザリオの月です。10月7日(金)には、ロザリオの聖母の記念日を祝います。

今年の7月に永眠した永六輔さん夫妻の新婚旅行に、あの「寅さん」の渥美清さんがわろびれた様子もなくついて来たそうです。

旅先から必ず葉書を出す習慣がある永六輔さんは、その新婚旅行中にも毎日、葉書を書き続けました。

ある日、葉書を書き始めた永六輔さんの横に座った渥美清さんが、「一枚、くれない?」と言いました。

「どうぞ、どうぞ」と永六輔さんは、渥美清さんに新しい葉書を渡しました。

それから毎日、渥美清さんは、葉書を書き、永六輔さんが切手を渡すとそれを貼って出していました。

永六輔さん夫妻は、好奇心にかられ堪りかねて盗み見しました。

そしたら、「お袋、俺、元気。」

たったそれだけだったと。毎日、毎日。

永六輔さんは「あー、渥美清だなんて感じました。母親が一番欲しい情報を、簡潔に伝える。」と書いています。渥美清さんは子どもの頃から病弱で、お母さんに苦勞をかけていたのだそうです。

ロザリオの月。度々、「アヴェ・マリアの祈り」を唱えます。

「神の母聖マリア、わたしたち罪びとのために、今も、死を迎える時も、お祈りください。」と繰り返し祈ります。

いつも、ただ「お祈りください」と願うだけではなく、わたしたちの母である聖母マリアに、感謝のメッセージを送りましょう。

「お袋、俺、元気。」

※永六輔さんと渥美清さんのエピソードは、「永六輔の伝言 矢崎泰久編(集英社文庫)」から

いつくしみの母

いつくしみの特別聖年が残り一ヶ月と少しくなりました。私たちはこの特別聖年の間、御父のいつくしみを体験し、他者へ神のいつくしみを告げ知らせたでしょうか?大勅書に書かれているいつくしみの母マリアを思い起こし、残りの特別聖年を過ごしましょう。

24 ここで、わたしたちの思いをいつくしみの母に向けましょう。この特別聖年の間、その優しいまなざしをもって、わたしたちに寄り添ってくださいますように。そうしてわたしたちは皆が、神が柔和でおられることの喜びを新たに見いだせますように。マリアほど、人となられた神の深い神秘を知っている人はいません。その全生涯は、受肉したいつくしみの存在で形づくられました。十字架につけられ復活したかたの母は、神の神秘に深くあずかることで、神のいつくしみの聖域に入られたのです。

神の子の母になるために選ばれたマリアは、神と人との間の契約の櫃となるために、御父の愛によってはじめの時から準備されてきました。マリアは、御子イエスとの完全な調和をもって、心に神のいつくしみを守っていました。エリザベトの家の戸口で歌ったマリアの賛歌は、「代々に限りなく」(ルカ 1:50) 及ぶいつくしみに向け

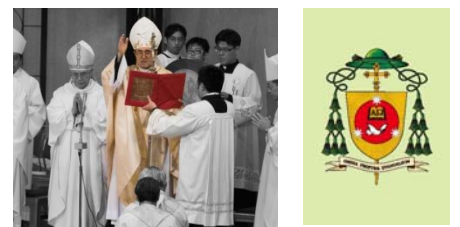
られたものです。おとめマリアのこの預言的なことばの中には、私たち自身の姿も示されていました。それは、神のいつくしみの実りを味わうために聖なる門をくぐる際、わたしたちを慰め励ますことでしょう。

十字架の傍らでマリアは、愛弟子ヨハネとともに、イエスが口にしたゆるしのことばの証人となりました。イエスを十字架につけた者たちに与えられた究極のゆるしは、神のいつくしみはいかに果てのないものであるかを私たちに教えます。マリアは、神の子のいつくしみが限りなく、例外なくだれもがこれにあずかることを証言しています。古いながらもつねに新しい祈り、サルヴェ・レジナをマリアにささげましょう。マリアがたゆむことなく、わたしたちにいつくしみのまなざしを注いでくださいますように。いつくしみのみ顔である御子イエスを観想するにふさわしいものとしてくださいますように。

教皇フランシスコいつくしみの特別聖年公布の大勅書「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」(第24項前段・中段抜粋)

(カトリック中央協議会 訳)

白浜司教・広島教区長に着座



主な教会暦(主日を除く)

- 10月07日 ロザリオの聖母(記念日)
- 10月18日 聖ルカ福音記者(祝日)
- 10月28日 聖シモン・聖ユダ使徒(祝日)



(ホームページ)